

火星

平成二十六年八月号



七曜抄

(八)

山尾玉藻

にべもなく風とほしけり白菖蒲

鯉が亀が見定めに来し梅雨の傘

汗の身に汗し搔つこむ深川井

羅の僧ひるがへる上野駅

なんのかのとまた夾竹桃のころ

昼寝より覚めしをさなに見詰めらる

七月の水に映れる夜の杉

死に顔を見にゆく日傘開きけり

箱庭の九体寺もまた雨待てる

ばつてらや川筋は灯のなつかしく

太白星

子羊の毛刈の濟みし空の青
ターナーの絵の暗がりに春惜しむ
へうたんの水酒となる桜の夜
花冷の鳥居の奥の砂利踏む音
ケーブルカー桜吹雪の中帰る
天道虫木の橋ぬくき音のして
郭公の飛びてさびしき森となる

杉浦典子

浜口高子

眼鏡はづし総身に浴びる日雷
くちびるを薄く鳴きけり恋の猫
しろがねの糸に雨つぶ毛虫の子
大江山の風呼んでゐる昼蛙
逝く春を乗せて出でけり十石舟
九段坂下り来しアイスキャンデー屋
火の山の今朝の静けさ閑古鳥

火星作品

山尾玉藻選

婚列のちよつと止まりし花蜜柑
八幡山田美恵子

花椎の香に蒸されぬる鍬の音

鹿なべて寸ほどの角緑さす

つやつやの餡こが鍋に朝曇

梅雨の雷若き阿修羅に近づき来
神戸坂口夫佐子

藤の香に少し遅れて風のそよ

雨きざす背中は合はせの鉄線花

髪切つて来たる新茶の試飲会

囀に押し出されたる舳かな

船頭の唄わたりくる葱坊主
宝塚山本耀子

夏蜜柑の飛沫に空膨らみぬ

尿長し黒牛御田出でしより

そら豆に切込み入るる咎すこし

こ 生 乙 八 ゆ 青 緋 海 青 青 燕 足 イ 釣 薰 西 青
と 國 訓 十 く 梅 袴 中 嵐 嵐 二 裏 カ 堀 風 日 梅
ご を や 八 春 雨 の や 産 の 羽 を カ の の や 濃 を
と を 辻 夜 の 伏 の 牧 屋 の 揃 砂 の 幼 の 深 き 数
と 間 の 水 の 見 の 丹 の 片 づ う の 泥 舟 舟 舟 数
く は の か 見 の 島 の 戸 つ て 反 梅 梅 舟 舟 舟 数
天 れ の げ ら 島 の 開 つ て 反 雨 雨 舟 舟 舟 数
を れ 的 ろ ふ が 暮 の いて 梅 雨 雨 舟 舟 舟 数
慕 を を 橋 の 暮 いて 雨 雨 舟 舟 舟 数
う を り し 橋 の 暮 いて 雨 雨 舟 舟 舟 数
て し 橋 の 暮 いて 雨 雨 舟 舟 舟 数
桐 更 なる 裏 暮 いて 雨 雨 舟 舟 舟 数
の 衣 なる 裏 暮 いて 雨 雨 舟 舟 舟 数
花 衣 なる 裏 暮 いて 雨 雨 舟 舟 舟 数

大和郡山 深澤 鱻

八幡大山 文子

宝塚河崎 尚子

選のあとに 山尾 玉藻

花椎の香に蒸されぬる 鎌の音 山田美恵子

椎の花は青臭い強烈な匂いを発する。畑土を反す鎌の音もその強い香にけぶるように思われたのだ。「蒸されぬる」が一句の眼目。この感覚は花椎の香を確かに言い得ている。

囀りに押し出されたる 舳かな 坂口夫佐子

小鳥たちが頻りに囀る樹木の茂る岸边から舟がすべり出た景を見て、作者はまるで舳か囀に押し出されたかのように感じた。囀には命と愛を朗々と讃えるエネルギーがある。

夏蜜柑の飛沫に 空気膨らみぬ 山本 耀子

夏蜜柑の果肉袋を剥くと思いい切り果汁が飛び散って豊潤な香りが辺りに漂い、忽ち瑞々しさに包まれる。その感受を俳人の鋭敏な触手が「空気膨らみぬ」と捉えた。成程である。

薫風や 深泥け ぶらせ 舟廻る 河崎 尚子

伏見壕川詠。緩やかな壕川を十石舟が方向転換した途端に川底の泥が烟り立った。小さな舟が呼んだちよつとした現象を「薫風」が際立たせる。平常心を失いがちとなる吟行では、この冷静な客観写生の眼を忘れてはならない。

青嵐のどんつきに 在す 火伏神 大山 文子

鄙びた小さな社の奥に祀られる火伏神であろう。青嵐に煽られるその神を少々気の毒に思う作者。一見ぞんざいな表現の「どんつき」の裏に籠められた思いを汲み取りたい。

ゆく春の伏見は水に浮かみぬし 深澤 巖

こちらも伏見吟行詠。淀川水運の港町であった伏見は、今も酒造に適う良質で豊かな水に恵まれる。その地を「水に浮かみぬし」と捉えて誠的確。「ゆく春」のたゆとう感も効果的。訪れた地を大きく捉えて讃えることも吟行の醍醐味。

今年竹空のはきはきしてきたり 蘭定かず子

「今年竹」は大抵写生的に詠まれるが、掲句は自己の心象を巧みに重ねて詠んだ。対象に自己の思いをのせた「はきはきしてきたり」が、愈々「今年竹」の本質を際立たせる。

海に入る川に力や花蜜柑 城 孝子

十分な量感を伝えつつ、それと呼応する細やかな感受も滲える印象的な一句である。この句には二物配合、照応の基本があり、表現の完成度も高い。見事な絵画を成している。

竹皮を脱ぐや豊かに水こぼし 西村 節子

季語「竹皮を脱ぐ」はやや粗い手触り感あるものだと思っていたが、掲句により鮮やかな美しさを語り得る季語であることを改めて教えられた。旺盛な生命力を華麗に再現する。

(以下略)

恒星圈

山田美恵子

先生となる子草笛上手なり
薔薇垣の陰の子何に耽りぬし
薔薇垣の牧師の家に稚のこ糸
空梅雨や梵字に朱き仮名ふられ
峰雲へ背筋伸ばせる移民像

飯塚 糸子

山本 耀子

カウベルの音が風にのる聖五月
金魚藻の秘密基地めく繁りかな
足首をしつつかり使ふ若葉坂
しやりしやりと腰蓑鳴りぬ鵜飼舟
真つ白な母のエプロン金魚飼ふ

花街を錫杖の行く薄暑かな
掃き寄せてあり橋立の散松葉
小児病棟風鈴吊ればすぐ鳴れり
橋立は男松ばかりや海月浮く
もてなしは蹲踞に浮く目高どち

蘭定かず子

渡辺 数子

母の日の昼のワインをすごしけり
風さききだてて墓原を夏の蝶
夏めきにけりラディッシュのルビー色
唐門を出できし風の白日傘
眠りぬる巻毛のひたひ扇風機

いく世経し御所の大樹の夏落葉
祭馬列を逸れては戻さるる
背伸びして葵祭のわらべ見る
雨となる葵祭の絵巻かな
薔薇挿しぬ母の好みの備前焼

獅子座

山尾玉藻推薦

西村節子

湯谷良

今澤淑子

合歡咲くや桶に日輪衰へつ
日輪の真ん中昏き代田風
夕焼やステンドグラスめく棚田
がむしやらの歩をゆるめぬし遠蛙

涼野海音

藤田素子

山の上の電話ボックス燕来る
回送の寝台車過ぐ臙かな
日の差せる猿のこしかけ昭和の日
神杉に雨しづかななる立夏かな

林範昭

根本ひろ子

大神へ辞儀ふかぶかとサングラス
鳩の子の脇見せしまま潜きけり
ひと筆の河童の踊る夏のれん
矢車草女神の像は天あふぐ

雨あとの山毛櫛の嵩高五月来る
胸うすく母逝き給ふ緑夜かな
存外にす早く咲けり水中花
寄せて来る青蘆原の葉ずれかな
瓢箪池の向かう静もる青嵐
旅かばんに隠しポケット雲の峰
うつかりと夫に茅巻を買ひ忘れ
噴水の高し人影寄せ付けず
鬼平のよこぎりさうな青柳
柱時計鳴りて窮りし夏座敷
対岸は温泉街や夜の新樹
付けまつ毛の瞬きしたる暑さかな
吾が影に玉巻く芭蕉ほどけ初む
十葉の匂ひあふるる背負籠
影ふみの影をよこぎる羽抜鶏
夫の物取り替へにゆく栗の花